RIMS Kôkyûroku Bessatsu
B81 (2020), 105-121

『塵劫記』と書林板元Ⅱ
Jinkōki and PublishersⅡ

鈴木武雄

Takeo Suzuki*

Abstract

There are 4 kinds of *Jinkōki* published from 1641(*the 18th year of Kan'ei) to 1643(*the 20th year of Kan'ei). Three kinds of *Jinkōki* were published in 1641. One of them was the so-called Idaibon. The second was published by YASUDA Jūbei and the third was published by TENNŌJIYA Ichirōbyōe. NISHIMURA Matazaemon published *Jinkōki* in 1643. YASUDA,TENNŌJIYA and NISHIMURA were commercial publishers.

In addition to that, Idaibon was a mathematics book which had only problems without answers. The term "Idai" has been used since Edo era. And in early Edo era the word "Konomi" was used. I think it is possible that Idaibon *Jinkōki* was written by YOSHIDA Mitsuyoshi himself and published by SUMIKURA.

Jinkōki published by YASUDA is a similar book of *Jinkōki* published in 1627(*the 4th year of Kan'ei) and 1631(*the 8th year of Kan'ei). I think that *Jinkōki* by TENNŌJIYA is so-called "atozuri" later edition. It was reprinted original Idaibon *Jinkōki* after about 100 years. NISHIMURA Matazaemon published *Jinkōki* in 1643 based on Idaibon *Jinkōki*. There were misprint and miscalculate. But it became reference of after ages and similar books were reprinted.

When I review *Jinkōki* in term of publisher, I am able to analyze differently. In this paper, I investigated *Jinkōki* in term publisher. Until now, TENNŌJIYA *Jinkōki* has not received any attention or investigation. I found that the TNNŌJIYA *Jinkōki* had been the same as the original Idaibon *Jinkōki*. However, it turned out that the *Jinkōki* by TENNŌJIYA had been republished about 100 years after original Idaibon *Jinkōki*.

Received . November 23,2019. Revised .January 27,2020
2010 Mathematics Subject Classification(s): 01A27,01A45
Key Words: *Jinkōki*, YOSHIDA Mitsuyoshi, publisher
* KAKEGAWA City Education Center, 620 Mitsumata Kakegawa Shizuoka 437-1416, Japan.
e-mail;pk755733@da2.so-net.ne.jp

©2020 Research Institute for Mathematical Sciences, Kyoto University. All rights reserved.

§1. まえがき

本稿は 2018 年 9 月京都大学数理解析研究所(RIMS)「数学史の研究集会」における演題「塵劫記と書林板元」の継続研究です。寛永 18 年版(*遺題本と安田十兵衛開板本及び天王寺屋市郎兵衛開板本)及び寛永 20 年版(*西村又左衛門開板本)『塵劫記』について研究します。研究の視点は『塵劫記』を書林板元（書肆）から見直すことです。江戸時代において著作権という概念がなく、書林板元が大きな権限を有していました。そのため類版(偽版)がたくさん出版されました。類版(偽版)の存在は研究に際して注意が必要です。書林板元は民間出版業者です。それ以前の出版事業は時の権力者や寺院によるものでした。江戸時代になって多数の書林板元の出現は日本社会及び文化に大きな影響を及ぼすことになりました。寛永 21 年(1644 年)が寛永の終わりの年です。『塵劫記』は寛永 20 年版が最後の出版されたものです。

ここで寛永時代に出版された『塵劫記』をまとめます。寛永 4 年(1627 年)序文及び跋文のある『塵劫記』(*4 巻 26 条本 :以下寛永 4 年板『塵劫記』)は初版といわれています。しかし、寛永 8 年版と比較しても著者の序文がなく、奥付に刊行年や著者の吉田光由の名がなく、吉田光由自身が直接出版に関与したとは必ずしも思えません。本来奥付のある部分が長方形の黒ずみになっていることも不可解です。吉沢義則旧蔵本『塵劫記』(刊年不明，横綴本)は初期の『塵劫記』の形式が残っていて重要です。杉田版『塵劫記』、5 巻本『塵劫記』(刊年不明)もこれにつづいて貴重なものです。これらの『塵劫記』の出版については分からないことが多く、新史料の発見が必要です。(*柴田光彦[6]、戸谷清一[13][14][15][16]および米澤誠[26]) 寛永 8 年板『塵劫記』(1631 年)は吉田光由の自署が巻末にあり、直接吉田光由が出版に係わった思われます。寛永 9 年版『塵劫記』(1632 年)は中野市右衛門刊行のものです。中野市右衛門は京都で著名な書林板元でした。ただ、残存部数は東北大学林文庫に 2 部あり、2 部とも不完全本です。寛永 11 年板『ちんかうき』(*4 巻 63 条本，1634 年)は寛永 4 年版と内容が変わっています。序文と跋文が和文です。吉田光由の署名本があり、自身が刊行に係わったと思われます。山崎与右衛門は「その模様はそのまま遺題本に引き継がれたわけである」(*『塵劫記の研究 ; 図録版』p.218) 。序文が漢文の『塵劫記』(*3 巻 48 条本)には寛永 8 年 6 月版と 11 年 6 月版、さらに寛永 12 年版があるようです。しかも寛永 11 年 6 月版と寛永 13 年 6 月版には色刷本で光由署名本があるようです。(*山崎与右衛門『塵劫記の研究：図録編』p.165)

本稿は寛永 18 年版『塵劫記』(1641 年)と寛永 20 年版『塵劫記』(1643 年)の出版状況について考察をします。さて、『塵劫記』の研究で困難なことは、①完全本が少ない。②色刷の違いなど小さな違いも問題がある。③私蔵本が多く、現存状況も不明である。④類版(偽版)の評価が定まっていない。⑤後刷本の評価がされていない。などの様々な問題があります。

本稿では従来ほとんど追究されてこなかった『塵劫記』について書林板元研究からアプローチします。書林板元研究には学問的な分野としての蓄積がありま

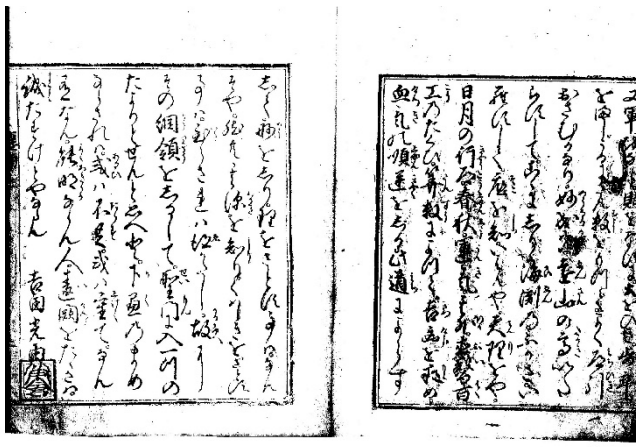
す。それらの成果を和算書の場合に適用し考察することによって、『塵劫記』について新たな評価ができるはずです。

§2. 寛永十八年版『塵劫記』(*小型版 3 巻本，所謂「遺題本」，1641 年)

この『塵劫記』は序文末に吉田光由と角倉の角印があり、下巻末にも住所および吉田七兵衛尉光由と花押があります。このことからこの『塵劫記』は光由自身の著作で角倉家の出版と思われる重要なものです。しかも、下巻末に 12 題の問題を遺しましたので“遺題本”と呼ばれています。所謂「遺題」という用語は近代になって用いられ、近世初期において礒村吉徳『算法闕疑抄』(1659 年初刊)第 4 巻などで「好み」「好」と書かれています。この遺題を後世の和算家が解き、さらに自作の新しい遺題をのせた和算書を出版しました。このようなリレー形式で繋がるユニークな数学文化が生まれ、数学的な発展と和算書の出版が活発になったことは重要な貢献でしょう。遺題本『塵劫記』はその発端となった意味でも数学史上において稀有な数学書でしょう。本書の残存部数は少なく、完全本は山崎与右衛門書蔵本だけのようです。上巻 54 丁、中巻 55 丁、下巻 45 丁からなっています。大きさは横 14 ㎝、縦 19．4 ㎝ですから、A5 版より少し小さく、初期の和算書『万用不求算』など他にも例があります。本書は色刷本です。本書について他の所蔵先について下浦康邦「日本初期数学書所在目録」『和算：第 89 号』(近畿数学史学会，2000 年)によると 17 カ所あります。上中下巻揃い本はなく、下巻のみが 9 カ所あります。これは下巻に遺題が存在していることと関係しているかもしれません。

本書の上中下巻の序文、目次および後書を書き出します。序文は「大乗小乗」の図をはさんで二つに分かれます。

「新編塵劫記上巻見一を以除して乗し 又乗したるは法以除之其因除減乗する所を朱とすみと白字をもつていろの分 世にひろむる処に有人算法の道しらすして たゝ利のために我書を求板に開き朱にて 書字も墨となす是大成あやまりなり 故に二たび此書を板にひらき朱以て 色分我書のしるしと可定之 吉田光由 印」



序文続「夫算は伏儀隷首に命してより周官に保氏を置これより以来、算数世に行れて、国家の重器たり。誠にゆへ有哉、算の要たる事、国家を治、百姓

＜図 1．遺題本『塵劫記』序文末。左隅に角倉の角印＞

を導に及て方田、不足、勾股、円長有。その狭広を計て其耕をおさむるに、井田の法あり、十一の法あり、若其の法を乱たる時、百姓をたやかならず、又軍をなし、賦をなすに、土(*士)をひき歩卒をましうるに、さん数をもつてよく道引おさむるなり。妙成哉。遠山の高いたらすしてここにしり、海淵のふかさいらすしてそこを知る。いわんや天理をや。日月の行道春秋の運気その外巫医百工のたくひ、算数によつて吉凶を求め、血気の順逆をしる。此道によらすして妙をしり、理をさとす事なんそや。然共其深を知り、くわしきをさとる事は至らされ得かたし。故に、その綱領をしるして、聖門に入壱つのたよりとせんと思へと、下愚のまめならされは或は不足或は重てなん有なん。能明ならん人この違闕をたたさは、誠たすけとやならん。　吉田光由　角倉の角印」

まず前半で本書の特徴は色分けした理由が書かれていることです。また、算法を知らないのに、利益のために吉田光由著『塵劫記』を購入して、それに基づいて新たに開板していることです。即ち、書林板元による類版『塵劫記』を批判しているのです。さらに後半では、算数が実学の要であることを宣言しています。即ち、国家の財政と農業を数学で革新させようとするものです。また、軍勢の編成や動員の効率的な方法、測量の重要性、天文暦法の重要性を述べています。さらに吉凶に数学を利用し、医術の血気の流れを数学的に知る重要性を述べています。ようするに吉田光由は数学を実際に応用できるものとしようとしていたのです。

目次(*原書には目次に番号はありませんが、仮の番号を付けました。)

＜上巻＞

1. 九九
2. 八算
3. 見一
4. 見二
5. 見三
6. 見四
7. 見五
8. 見六
9. 見七
10. 見八
11. 見九
13. 検地
14. 知行物成
15. 蔵俵入積
16. 杉算
17. 米売買
18. 銀両替
19. 銭売買
20. 万利足
21. 絹布
22. 金薄積
23. 屏風薄積

12．掛割算

＜中巻＞

「中巻前文 : 新編塵劫記は商実の法以 実を除乗する所を朱と墨と白字を以 いろの分我におろか成人に伝かためなり 然処に有人算勘の道しらさる故に我 書をうつし求て板に開き我名をかりいて 是を商此朱を墨となす事誠に大成 あやまりなれ共世渡る人其あやまりをしらす して求之是後世のたすけとやならんために今新判を世にひろむへし　光由」

○．二項係数と同類の図(*パスカルの三角形と同類の図。原本に説明なし)

1．乗因法
2．除法
3．開平法
4．廉法
5．解法図
6．開平帯従
7．廉法
8．古形帯従
9．平円解
10．開平円法
11．開立円法
12．切籠
13．かざり金物
14．塗物積
15．普請割
16．升法
17．ひしゃくわけ物
18．小おけ、大桶
19．材木
20．小引
21．ふき板積
22．竹廻

＜下巻＞

「下巻前文：新編塵劫記下巻には四十二カ所の積算をあけ置此内にも違闕あらん勘の達者成人 是をたゞして 世に伝へは 誠に国家の重器たるへし 又世に算勘の達者数人有といへ共道に不入して其勘者の位をよの常の人見分かたし 只はやけれは上手といふ 是ひが事也 故に其算者の位を大かた諸人の見わけんかために 今此巻に法を除て出之処十二カ所有 算者は此さんの法 を住して世に伝へし 然共住するに軽重有哉或はほんざんにあらざずして 其身の心にあふといふとも 類をもつて是をわれは 相違可有 又勘の器用たりといふ共 師にあらわさる 勘者はふかき事を不知 我此外に 製する所の算書十五巻有まして算芸に名ある人は 六芸の一つに備て不庸と云事なし　吉田光由」(*下線は筆者による)

下線部分「今此巻に法を除て出之処十二カ所有」という文言が所謂「遺題」のことを意味しています。

1．積算四十二問
2．百五減
3．薬師算
4．入子算
5．買合分
6．運賃算
7．親子家渡
8．万知行割
9．大工之割

＜遺題＞
1．勾股積
2．円截積
3．二組四色
4．二組三色
5．二組三色
6．盈朒法
7．方台
8．円台
9．栗石積

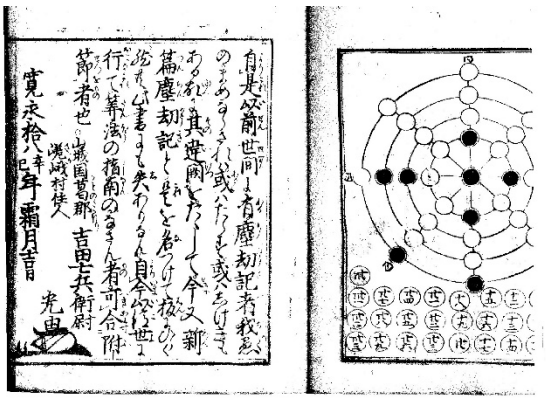
10．橋積　　10．円截積
11．立木長知　　11．12．図のみ
＜下巻後書＞

「自レ是以前世間に有、塵劫記者 我愚の　まめなられは　或はたらす或はしけきもある故に、其違闕をたたして　今又　新編塵劫記と　是を名つけて板にひらく　然共此書にも失ありなん　自レ今以後世に　行われて　算法の指南のさん者　可レ合二附節一　者也。

山城国葛郡　　吉田七兵衛尉

嵯峨村住人　　光由(花押)

寛永拾八年辛巳年霜月吉日」(*霜月は陰暦 11 月のこと)



＜図 2：遺題本『塵劫記』:下巻後書＞

本書いわゆる遺題本は寛永 4 年版『塵劫記』などと比較して目次からして吉田光由の意欲を感じます。さらに中巻の序文には「数学を知らず、我が塵劫記を写し、我が名を借りて板行した」ことを強く非難しています。即ち、類版(偽版)の存在を厳しく非難しています。この類版(偽版)はどの塵劫記を指しているのでしょうか。少なくとも、寛永 18 年 11 月以前に出版された『塵劫記』ということになります。

§3．安田十兵衛版『新編塵劫記』(寛永十八年六月刊，大型 3 巻本)

本書は京都で名が知られた書林板元安田十兵衛が開板したものです。本書の出版は前記遺題本『塵劫記』よりも 5 ヶ月前です。本書は残存部数も 18 カ所もあり、上中下巻揃本も 5 カ所も知られています(*下浦康邦「日本近世数学書所在目録」)。その意味ではよく売れたと思われます。尚、和算研究所(編)『塵劫記　JINKOKI』(2000 年刊)は本書を底本にしています。本書も吉田光由の批判の対象になった可能性があります。

まず序文については寛永 4 年版とほぼ同じです。3 行目の「四巻」が「十八巻」になっています。これは寛永 8 年版と同じです。従って、序文は省略します。

＜上巻の目次＞

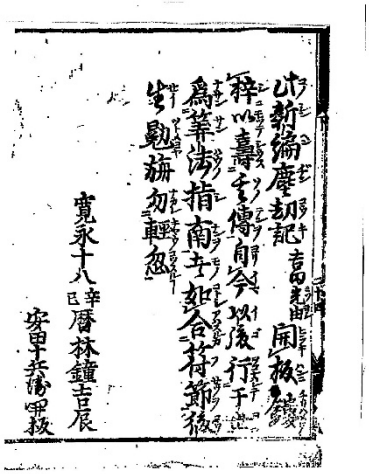
1. 大かずの名の事
2. 一よりうちこかすの名の事
3. 一石より内のこかすの名の事
4. 田の名かすの事
5. 諸物軽重乃事
6. 九九の事
7. 八さん割之図附かけざんあり
8. 見一わりの図附かけさんあり
9. かけてわるさんの事
10. 米うりかいの事
11. 俵まわしの事
12. (*欠：杉算の事)
13. 蔵に米の入りつもりの事
14. せにうりかいの事
15. 銀両かへの事
16. 金両かへの事
17. 小ばん両かへの事
18. 利足の事
19. きぬもめんうりかいの事

＜中巻の目次＞

20. 入子さんの事
21. 長さきのかい物
三人相合かい分で取る事
22. ふねのうんちんの事
23. 検地の事
24. 知行物成の事
25. ますの法附むかし升の法あり
26. よろつにます目つもる事
27. 材木うりかひの事
28. ひわだまわしの事附竹まわしあり
29. 屋根のふき板つもる事
附こうはいののびあり
30. びやうぶにはくをくつもりの事
31. 河普請の事
32. ほりふしんの事

＜下巻の目次＞

33. まま子だての事
34. はしの入目を町中へわりかける事
35. 立木の長をつもる事
36. 町つもりの事
37. ねずみさんの事
38. ひにひに一ばいの事
39. 日本国中の男女数の事
40. からすさんの事
41. 金銀千枚を開立法につもる事
42. きぬ一たんぬの一たんのいと長の事
43. あぶらはかりわける事
44. 百五けんというさん
45. 薬算といふ事
46. 六里を四人して馬三疋にのる事
47. 三人してはかま二くたりきる事
48. 開平法の事
49. 開平円法の事
50. 開立法の事



＜後書＞

寛永 4 年版の跋文の 3 行目までそのまま書き出し、4 行目 5 行目を省略しています。また、跋文の末に「寛永十八年辛巳暦林鐘吉辰　安田十兵衛開板」とあります。

本書の序文、本文の目次内容、後書を見ると、安田十兵衛は寛永 8 年版を改刻して出版したのです。目次 12 番目が欠落しているなど安易な出版とも言えましょう。

＜左図 3：安田十兵衛開板『塵劫記』巻末＞

§4. 安田十兵衛(*書林板元としての活動)

安田十兵衛は京都(*洛陽三条寺町誓願寺前)の書林板元で、寛永年代から明暦年代頃まで 30 部弱の他種類の書籍を出版しています。岡雅彦他(編)『近世初期出版年表』によると、安田十兵衛開板本は寛永 4 年(1627)『曽我物語』が最初です。また、最後の開版が明暦 4 年(1658)『鸚鵡集』のようです。貞享 2 年(1685)『平治物語』がありますが、後刷と思われます。いずれにしても安田十兵衛の生没年など経歴も一切分かっていません。和算書は寛永 18 年(1641)『新編塵劫記』と寛永 21 年(1644)『万用不求算』だけの出版が知られています。尚、『万用不求算』については筆者による RIMS 論文(B69,2018)があります。

井上隆明『近世書林板元総覧』(青裳堂書店.p.619)に簡単な記述があります。「安田十兵衛　京三條寺町誓願寺前（万治 2 年本）→寺町通和泉式部前町六角下ル」とありますから住居が後に変わっています。京都府書店商業組合編『京都書肆変遷史－出版文化の源流』にもほぼ同様な記述があります。

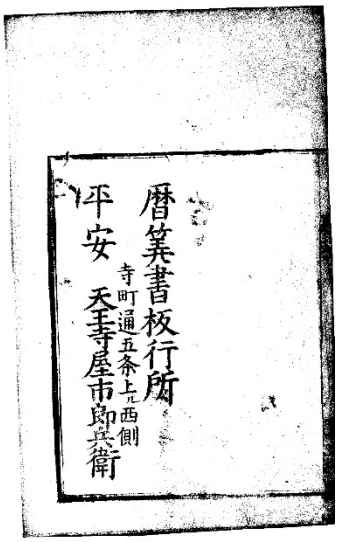
以上のことから安田十兵衛開板『新編塵劫記』が寛永 18 年に開板されたことは間違いないでしょう。

§5. 天王寺屋市郎兵衛開板『新編塵劫記』(*寛永十八年，半紙本)

これまで本書について存在は知られていましたが、不思議なことに注目も調査もされてきませんでした。本書について結論を先に書きましょう。本書は寛永 18 年遺題本『塵劫記』の約 100 年後の所謂「後刷本」であることが判明しました。ただし、本書は遺題本と中巻の序文と下巻の序文がそれぞれ目次になっているだけで、他はまったく同じです。もちろん序文も跋文も奥付もまったく同じで

す。従って本書は遺題本と同じ板木を使用したと思われます。遺題本をバラして板木に張り付けて彫り直したことも考えられます。本書の序文、後書、目次などは遺題本と同じですので省略します。

筆者は2018年2月東京のある古書店目録に本書が掲載されていて、それを購入しました。それで本書をつぶさに調査することができました。尚、藤原松三郎『明治前日本数学史』(第1巻,pp.192-193)には本書の書名だけあり、欄外に註として「暦算書板行所　寺町通五条上ル西側　平安　天王寺屋市郎兵衛とあるものが石黒信由旧蔵書中にある」とあります。尚、本書は東北大学藤原集書(001)に現存しています。



天王寺屋市郎兵衛開板『新編塵劫記』が遺題本の後刷であることは、いくつかの理由があります。

①天王寺屋市郎兵衛が書林板元として活動したのは元禄の頃からということが判明しましたので、寛永18 年(1641 年)に本書が出版されたことはあり得ません。(*§6.細述)

②本書の大きさは横15.5 ㎝、縦22.8 ㎝で、通常「半紙本」といいます。これに対して遺題本は横14 ㎝、縦 19.4 ㎝で、通常「小型本」といいます。従って、本書は遺題本より3.4ミリ縦長になっていますから、上部にそれだけの余分の空白があります。江戸時代後期の和算書(*藤田定資『精要算法』(天明2年(1782 年)など)には半紙本が非常多く、本書はそれと同じ特徴を持っています。表紙も同じ特徴です。

＜図4：天王寺屋市郎兵衛開板『塵劫記』の巻末。＊図2の裏の頁＞

§6. 天王寺屋市郎兵衛(書林板元としての出版物など)

1. 岡雅彦他(編)『近世初期出版年表』によると天王寺屋市郎兵衛開板の書籍は、慶安元年(1648年)『井蛙抄』が唯一掲載されています。『井蛙抄』は他の書林板元から再版があり、慶安元年に天王寺屋市郎兵衛が出版したと断定できません。尚、天王寺屋市郎兵衛開板『新編塵劫記』(*寛永18年)の記載はありません。

2. 京都府書店商業組合『京都書肆変遷史－出版文化の源流』(p.251)に、「天王寺屋市郎兵衛・水玉堂。活動期間：元禄年間から慶応年間。営業場所：寺町通五条上ル。姓は葛西、堂号は水玉堂と呼ぶ。創業は元禄年間寺町五条上ルで儒書の出版社。初代の名は好廷。明和、安永、天明頃の主人の名は應禎、字は甲卿」とあります。

3. 井上隆明『近世書林板元総覧』によると「1443 天王寺屋市郎兵衛　水玉堂　葛西氏　京五条通寺町上ル西側。出版物：貝原篤信『初学詩法』(延宝七年)，松澤

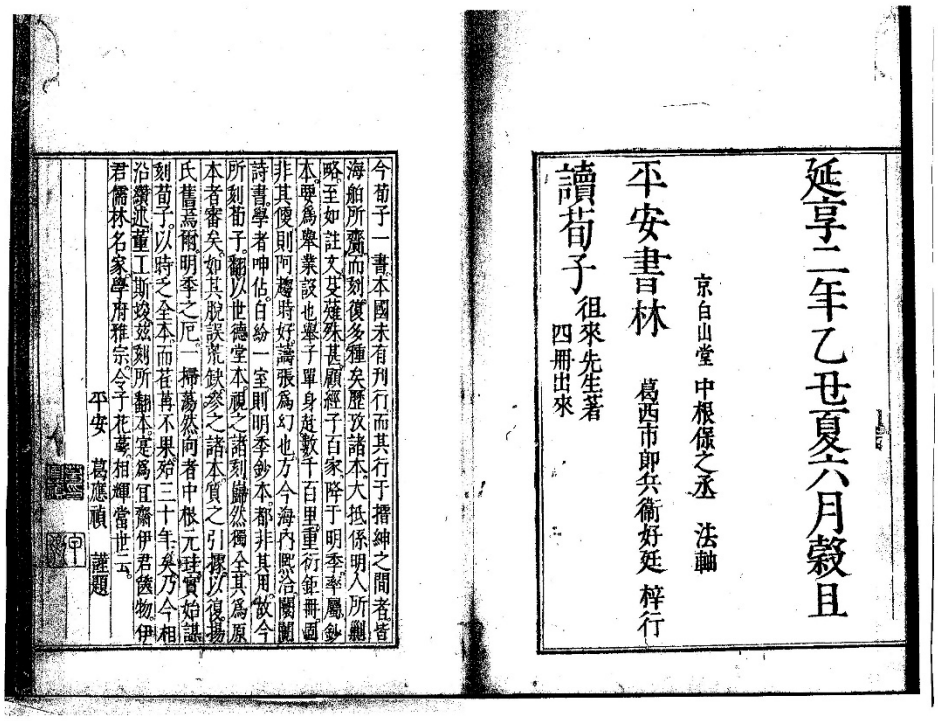
純眞『学詩堂詩抄』(安政二年)。初代は好廷。明和期の当主は漢学の葛應禎、字甲卿」とあります。二代目が葛應禎であり、好廷の息子と思われます。

以上のことから、天王寺屋市郎兵衛のことがかなり判明します。まず天王寺屋市郎兵衛好廷は葛西市郎兵衛好廷と同一人物です。そこで好廷が開板した書籍を調べてみると元禄 10 年(1697 年)『四書大全：説約合参正解』(呉荃、車方育、三雲義正(訓点))と延享 2 年(1745 年)『荀子全書』(周・荀況撰、唐・楊倞注)の２書があります。

① 『四書大全』は、いわゆる儒学の四書「大学、中庸、論語、孟子」の全集です。本書は全 30 巻であり、総丁数(*総頁数)が 1,371 丁(*2,742 頁)もある大著なのです。本書の字体も立派であり好廷がもっとも力を入れて出版した書籍と思われます。本書の末(奥付)に「元禄十丁丑載孟春穀旦。住寺町五條橋詰町西側。平安城書林　天王寺屋市郎兵衛好廷　梓行」とあります。本書の跋文は 3 丁(*6 頁)あり、それは訓点をした三雲義正です。跋文の末に「元禄丁丑春三月哉生魄　洛陽後学三雲義正新四郎謹書」にあるとおり、奥付の次に跋文が書かれています。このような書籍の例を筆者は見たことがありません。天王寺屋市郎兵衛好廷はよほど本書に強い思い入れがあり、後刷を他の書林板元でされるとき、奥付が削られることを恐れ、自らの名を残したかったと思われます。早稲田大学所蔵の『四書大全』は後刷本で跋文の次の頁は須原屋茂兵衛を含め 10 店の書林板元の名が書かれています。

＜図 5：『四書大全』の奥付。天王寺屋市郎兵衛好廷蔵梓＞

② 『荀子全書』は、性悪説で著名な荀子の全書です。本書は日本で最初に刊行された荀子全書と思われます。本書は全 20 巻の大著です。本書は筆者書蔵本を使用しています。荀子を学ぶことは朱子学を正統とする学問からしますと異端というべき存在です。例えば朝鮮王朝において朱子学一辺倒であり荀子や陽明学などを学ぶなど考えられません。徳川幕府の公認の学問は林羅山による朱子学でしたが、朝鮮王朝(李氏朝鮮)ほど徹底されたわけではありません。有名な荻生徂徠は『讀荀子』(天明 2 年刊)を著しています。この書籍も葛西市郎兵衛が出版しています。このことが『荀子全書』奥付から読み取れます。奥付と跋文


延享二年乙丑夏六月穀旦
京白山堂　中根保之丞　法軸
平安書林　葛西市郎兵衛好廷　梓行
讀荀子　徂來先生著　四冊出來

今荀子一書本國未有刊行而其行于搢紳之間者皆海舶所齎而刻復多種矣歷攷諸本大抵係明人所剿略至如註文芟薙殊甚顧經子百家降于明季率屬鈔本要爲舉業設也臺子單身廷數千百里重衍鉅冊固非其便則阿趨時好譎張爲幻也方今海內熙洽闔闢詩書學者呻佔自紛一室則明季鈔本都非其用故今所刻荀子翻以世德堂本覆之諸刻歸然獨全其爲原本者審矣如其脫誤荒缺參之諸本質之引據以復揚氏舊爲稱明季之厄一掃蕩然向者中根元珪實始謀刻荀子以時之全本而荏苒不果殆三十年矣乃今相沿纘述董工斯役茲刻所翻本定爲宜齋伊君餞物伊君儒林名家學府雅宗令子花蕚相輝當世云

平安　葛應禎　謹題

＜図 6：『荀子全書』左:跋文、右：奥付＞

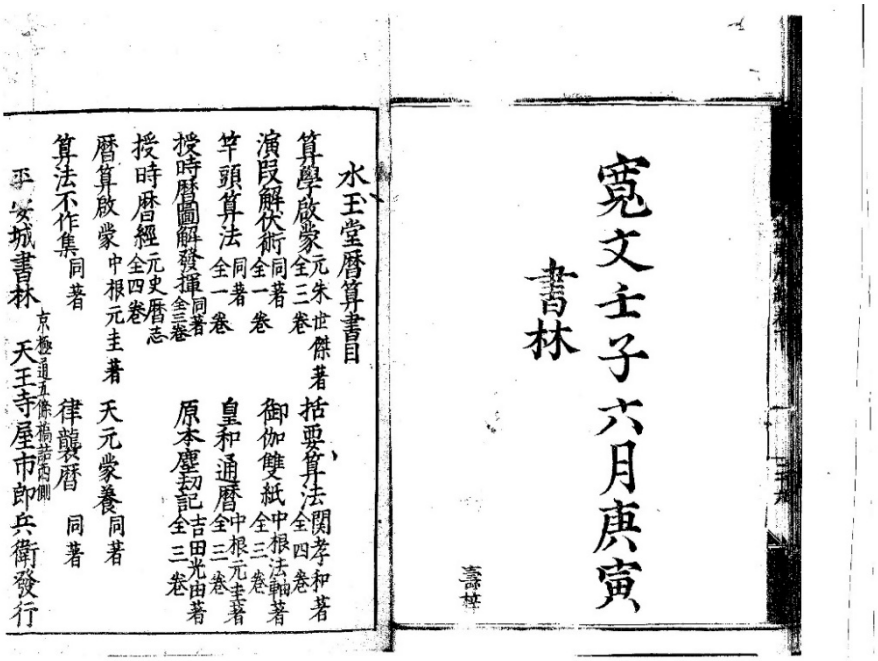
「延享二年乙丑(*1745 年)夏六月穀旦。京白山堂　中根保之丞法軸。平安書林葛西市郎兵衛好廷 梓行。讀荀子 徂徠先生 四冊出来」
本書の跋文は奥付の前に漢文で 1 頁あり、その末に「平安　葛應禎 謹題　印印」とあります。さらに跋文は荀子全書の由来を述べ、その 9 行目から「‥‥中根元珪實始謀刻荀子‥‥」と著名な暦算家であった中根元珪(*中根元圭:1662-1733)とあることも注目すべきことです。中根保之丞法軸とは中根元圭の息子で和算家であった中根彦循(1701-1761)のことです。葛西市郎兵衛好廷の息子が葛應禎であったと思われます。この 4 人と荻生徂徠(1666-1728)の関係があったと思われます。このことは中根元圭の数学思想を考える上で重要な視点となるはずです。

③ 葛應禎は『平安人物志』の明和 5 年(1768)版、安永 4 年(1775)版、天明 2 年(1783)版の漢学の部にあります。そのころ葛應禎は京都で漢学者として知られていたことが分かります。ただし、彼の生没年なども不明です。

④ 中根彦循『竿頭算法』(元文3年(1738年))は、青山利永『中学算法』(享保4年(1719年))の遺題12問を解き、遺題25問を遺したものです。本書には3つの序文がありますが、その最初が葛應禎です。中根彦循と葛應禎との密接な関係が分かります。書林板元は「暦算書取次所平安天王寺屋市郎兵衛」となっています。本書の巻末には「水玉堂(蔵板)暦算書目」があります。

⑤ 中根彦循『勘者御伽雙紙』(寛保3年(1743年))は、絵入りで数学遊戯問題があります。本書の奥付には「寛保三年癸亥年正月吉祥日　寺町通橋詰町西側　平安　書林天王寺屋市郎兵衛壽梓」とあります。尚、跋文の末に「平安書林　葛西某　謹書」と書かれています。おそらく葛西某とは葛應禎のことでしょう。本書の巻末には「水玉堂(蔵板)書目」がないものとあるものがあります。中根彦循が刊行した和算書は上記の２書だけと思われます。

⑥ 「水玉堂(蔵板)暦算書目」は、1頁の書目から、2頁(*2種)、3頁(*2種)、4頁(*2種)など7種類以上知られています。1頁の書目が最初期のものと思われます。これには「原本塵劫記　吉田光由著　全三巻」とあり、これこそが天王寺屋市郎兵衛開版『新編塵劫記』でしょう。2頁の書目からは「新編塵劫記　吉田光由原本　一冊」と少し表記が異なりますが、該書でしょう。


寛文壬子六月庚寅
書林
壽梓
水玉堂暦算書目
算學啟蒙 元朱世傑著 全三巻
括要算法 関孝和著 全四巻
演段解伏術 同著 全一巻
御伽雙紙 中根法軸著 全三巻
竿頭算法 同著 全一巻
皇和通暦 中根元圭著 全三巻
授時暦圖解發揮 同著 全三巻
原本塵劫記 吉田光由著 全三巻
授時暦經 元史暦志 全四巻
暦算啟蒙 中根元圭著
天元蒙養 同著
算法不作集 同著
律龍暦 同著
平安城書林 京極通五條橋詰西側
天王寺屋市郎兵衛發行

＜図7：『授時暦議』巻末。左：「水玉堂暦算書目」＞

⑦ 「水玉堂(蔵板)暦算書目」で最初期の1頁書目の年紀は不明です。ただ、中根彦循と天王寺屋市郎兵衛との交流の度合いから、『勘者御伽雙紙』(1743年)と『荀子全書』(1745年)の頃と考えるのが妥当でしょう。

⑧ 以上のことから天王寺屋市郎兵衛開板『塵劫記』の刊行は、1743年から1745年ころと推定できます。天王寺屋市郎兵衛開板『塵劫記』の刊行は遺題本より、実に約100年後の刊行となります。もし同じ板木を使用したとしても、本書の刊行年をどのように扱うのか問題が残ります。

§7. 西村又左衛門開板『新編塵劫記』(寛永二十年(1643年))

本書は大型3巻本で、横18㎝、縦28㎝、巻一35丁、巻二36丁、巻三21丁です。書林板元による出版だけに多数の絵図が挿入され、大型本らしく読みやすくなっています。本書は岩波文庫本『塵劫記』(大矢真一校注,1977年初版)の底本になっています。この凡例には「この版は、それまでの諸版の内容を集成し、以後の流布本の祖本となったものだからである。且つこの本は稀本であり、今のところ完全なものは見当たっていない。」と書かれています。一方で下浦康邦「日本初期数学書所在目録」(2000年)によると、本書は17カ所に所蔵されていて、3冊揃本は東北大学書蔵本を含む4カ所記載されています。筆者も下巻を所蔵しています。尚、本書には凡例にあるように誤刻や明かな計算違いがあります。これは書林板元が著者である吉田光由に無断で刊行したからと思われ、まさに著者の批判するところです。

本書の序文は、寛永18年の遺題本『塵劫記』と同じですが、さすがに吉田光由の署名はありません。目次と内容については岩波文庫本を参照されればよいのですが、書き出します。

＜上巻の目次＞

・表紙の見返しに円鑽の図
・序文
・目録
1. 大数の名
2. 小数の名
3. 糧の名の数
4. 田数の名
5. 諸物軽重の事
6. 九九之数
7. 八さんのわりこえ
8. 見一
9. かけてわれるさんの事
10. 米うりかひの事
11. 俵まわしの事
12. 俵すぎさんの事
13. 蔵にたわらの入つもり
14. 銭売買の事
15. 銭両替の事
16. 金両替のこと
17. 小判両替の事
18. 万利足の事

＜中巻の目次＞

1. 入子さんの事
2. ながさきの買物三人本銀に割付事
9. ひわだまわしの事
10. 竹束まわしの事

3. 舟のうんちんの事
4. けんちつもりの事
5. 知行物成の事
6. 升の法の事
7. よろづ升目入積りの事
8. 材木うり買ひまわしの事
11. やねのふき板つもる事
12. 同、こうばいののびの事
13. びやうぶに箔置つもりの事
14. はくうり買ひまわしの事
15. 河ぶしん割りの事
16. ほりぶしん割りの事

＜下巻の目次＞

1. まゝ子だての事
2. 橋の入目を町中へ割りかける事
3. 立木のながさを積る事
4. 町つもりの事
5. ねずみざんの事
6. ひにひに一ばいの事
7. 日本国中男女の数の事
8. からすざんといふ事
9. 布一たんの立ぬきの糸、長さを積事
10.きぬぬす人をしる事
11.あぶらはかりわくる事
12.金銀千枚を開立にしてつもる事
13.百五げんといふ事
14.やくし算といふ事
15.ざしきに畳敷いろりを入事
16.六里有道を四人して馬三疋に乗合事
17.三人としてはかま二くだりきる事
18.百万騎の人数をならべて見る事
19.開平法の図
20.開平円法図の事
21.開立法の事

＜図8：西村又左衛門板行『新編塵劫記』巻末＞

＜跋文と奥付＞

本書「西村又左衛門開板本」の跋文は、前記安田十兵衛開板本と同じです。

本書は全体的に言って寛永4年版、寛永8年版、寛永18年版(遺題本)をそれぞれ取捨選択して集成したものです。また、大型本で書林板元が出版したので商業的に売れて成功したと思われます。

§8. 西村又左衛門(書林板元としての出版物など)

西村又左衛門の生没年や経歴など知られていません。以下の文献も簡単な記述ですが引用します。

1. 井上隆明『近世書林板元総覧』(p.491)には、
   「西村又左衛門　諱忠勝　京寺町誓願寺前。出版物：寛永10年(1633年)『義経記』‥‥延享元年(1744年)」
   とだけあります。

2. 京都府書店商業組合『京都書肆変遷史－出版文化の源流』(p.285)には、
「西村又左衛門。営業期間：寛永年間～明暦年間。『安楽集』(唐・釈道踔綽)、『医方大成論』、『義経記』八巻、『御成敗式目』、『算俎』五巻(村松茂清)」と記載されています。ただし、『算俎』は寛文三年江戸の本町三丁目の西村又右衛門刊行ですので間違いです。
3. 岡雅彦他(編)『近世初期出版年表』には、寛永10年(1633年)『義経記』八巻が初出で、最後が明暦4年(1658年)『進藤流謠本』まで40種以上も記載されています。本書は明暦年間までの書籍しか掲載されていません。
その後を含めて暦算書は寛永20年(1643年)『新編塵劫記』、慶安2年(1649年)『新編塵劫記』、万治2年(1659年)眞説『長暦』、吉田光由『古暦便覧』があります。特に吉田光由『古暦便覧』を西村又左衛門が開板したことは興味あることです。吉田光由は寛文12年(1672年)に75歳で歿しているから、『古暦便覧』は生前最後の出版物です。そうすると、寛永20年(1643年)『新編塵劫記』を西村又左衛門が開板したとき、まだ吉田光由は元気であったようですから、どのような感情を持ったのでしょうか。

§9 まとめ

1. 寛永 18 年(1641)～寛永 20 年(1643)に開板された『塵劫記』は 4 種類知られています。
2. 寛永 18 年(1641)版『塵劫記』は 3 種類あります。1 つ目が所謂「遺題本」です。2 つ目が安田十兵衛開板本、3 つ目が天王寺屋市郎兵衛開板本です。安田本と天王寺屋本は商業出版業者によるものです。ただし、本研究 5,6,7,8 で書くように天王寺屋本は後刷でしたが、後刷した年号などはありません。従って、天王寺屋本の開板年を寛永 18 年(1641)とするしかありません。
3. 遺題本『塵劫記』(寛永 18 年霜月)は、その序文、中巻と下巻の前書、及び下巻後書の内容、さらに序文末に角倉の角印(*角倉家の開板か)と奥付「光由(花押)」から、吉田光由自身の著作で角倉家が開板(*自家版)した可能性が高いと思われます。
4. 安田十兵衛開板『塵劫記』(寛永 18 年林鐘)は、寛永 4 年(1627)版と寛永 8 年(1631)版の類板(偽板)でした。
5. 天王寺屋市郎兵衛開板『塵劫記』は、寛永 18 年(遺題本)『新編塵劫記』を約 100 年後に印刷した、同じ板木を使用した、所謂「後刷本」であることが判明しました。同じ板木ではなく所謂「被せ印刷」の可能性もあります。いずれにしろ後刷本をどのように評価すべきであろうか。
6. 天王寺屋市郎兵衛好廷は葛西市郎兵衛好廷と同一人物で、二代目(好廷の息子か)は京都で漢学者として知られていた葛應禎でした。
7. 天王寺屋市郎兵衛好廷開板の漢籍に元禄 10 年(1697)刊『四書大全』と延享 2 年(1745)刊『荀子全書』があります。『荀子全書』の跋文は葛應禎が書き、

その中に中根元圭(元珪)の貢献が書かれています。また奥付には、中根保之丞法軸(彦循)の名があります。暦算家中根元圭の息子が中根彦循で、天王寺屋と密接な関係が分かります。又、奥付に荻生徂徠『讀荀子』が書かれていて、彼らとの密接な関係が分かります。これらのことと中根元圭・彦循の数学思想と荀子の思想とが深く関係しているはずです。

8. 天王寺屋市郎兵衛は書林板元として「水玉堂」を名乗っています。よく知られていますが、「水玉堂(蔵板)暦算書目」が何種類かあり、多種多量の暦算書を開板しています。そのなかに「原本塵劫記」「新編塵劫記」が掲載されていて、これが天王寺屋市郎兵衛開板『塵劫記』のことと思われます。
9. 西村又左衛門開板『新編塵劫記』(寛永 20 年(1643))は、遺題本などを参考していますが、誤刻や計算間違いが指摘されています。ただ、後世に参考にされ類似版が何度も再版されました。西村又左衛門は万治 2 年(1659)に吉田光由『古暦便覧』を開板しています。

以上、書林板元という視点で『塵劫記』を見直すと、これまでと異なる分析ができたと思います。

まず、重要なことはこれまで天王寺屋市郎兵衛開板本『塵劫記』の存在は知られていましたが、注目もされず調査もされてこなかったことです。書林板元研究という視点によって、はじめて注目され調査がなされたのです。

特に本稿で発見されたことは、天王寺屋市郎兵衛開板本『塵劫記』が、遺題本『塵劫記』とほとんど同じですが、約 100 年後の開板であったことです。(*ただし、天王寺屋市郎兵衛による開板年はなく、元の遺題本の寛永 18 年だけしかありません。従って、天王寺屋本の正確な出版年は不明です。)約 100 年後の「後刷」であったことは、天王寺屋市郎兵衛が開板した和算書と漢籍の出版物の時期や若干の人物像から判明したことです。

謝辞

本研究にあたって RIMS「数学史の研究集会」おいて参加した研究者諸氏から有益なコメントを頂きました。それにより拙稿が充実したものになったと思います。RIMS 研究集会を組織して下さったことにも感謝申し上げます。尚、画像はほぼ筆者所蔵本によります。尚、査読者より貴重な示唆を戴きました。記して感謝申し上げます。

参考文献

[1]井上隆明『近世書林板元総覧』(青裳堂書店, 1981 年)
[2]井上宗雄『日本古典籍書誌学辞典』(岩波書店, 1999 年)
[3]上里春生『江戸書籍商史』(出版タイムス社, 1930 年)
[4]岡雅彦他『近世初期出版年表』(勉誠出版, 2011 年)

[5]京都府書店商業組合『京都書肆変遷史－出版文化の源流』(同編集委員会, 1994 年)
[6]柴田光彦「塵劫記版式考；寛永版四巻二六条本について」『早稲田大学図書館紀要』(第 5 巻 pp. 39-57, 1963 年)
[7]下浦康邦「日本近世数学書所在目録」『和算』(第 89 号,近畿数学史学会,2000 年)
[8]鈴木武雄「塵劫記と書林板元」RIMS 講究録別冊(B73, 2019 年)
[9]鈴木武雄「天王寺屋市郎兵衛と中根彦循－和算書の刊行年についての諸問題－」『数学史研究発表会』(同志社大学, 2019. 11. 10)
[10]鈴木武雄「『万用不求算』の謎」RIMS 講究録別冊(B69, 2018 年)
[11]田尻尚文「荻生徂徠と荀子」『中国研究集刊』(第 57 号, 大阪大学, 2013 年)
[12]田村三郎・下浦康邦「天理本「算用記」について」『RIMS 講究録:1061 号(1998 年)
[13]戸谷清一「寛永五年版『算用記』と寛永四年版『塵劫記』の比較」『数学史研究』(通巻 107 号, 1985 年 10 月～12 月)
[14]戸谷清一「「ますの法の事」の条からみた『塵劫記』の成立について」『数学史研究』(通巻 108 号, 1986 年 1 月～3 月)
[15]戸谷清一「寛永五年版『算用記』と古活字版および 4 巻 26 条本『塵劫記』の比較」『数学史研究』(通巻 111 号, 1986 年 10 月～12 月)
[16]戸谷清一「刊行不詳、古活字、横綴本『塵劫記』(吉沢本)について」『数学史研究』(通巻 116 号, 1988 年 1 月～3 月)
[17]中村喜代三『近世出版法の研究』(日本学術振興会,1972 年)
[18]平山諦「塵劫記及ビ改算記目録」『東北数学雑誌』vol.45,1939 年
[19]藤原松三郎『明治前日本数学史』(第 1 巻,岩波書店,1954 年)
[20]蒔田稲城『京坂書籍商史』(出版タイムス社, 1928 年)
[21]宗政五十緒『近世京都出版の研究』(同朋舎, 1982 年)
[22]正宗敦夫・他「書目集」『日本古典全集』(同刊行会, 1931 年)
[23]森潤三郎『考証学論攷－江戸の古書と蔵書家の調査』(青裳堂書店, 1979 年)
[24]山口智弘「荻生徂徠の初期儒学と仁斎学－自筆本『読荀子』の再考を中心に－」『中国文化：研究と教育』(第 72 巻, 筑波大学, 2014 年)
[25]山崎与右衛門『塵劫記の研究；図録編』(森北出版,1977 年)
[26]米澤誠「塵劫記の謎」『東北大学附属図書館報,木這子』(vol.28,№3,2003 年)